

喜多流能楽師

歳を経ても輝き続ける「真の花」を目指して。

大島衣恵さん

聞き手 佐々木尉文 オタフクソース(株)会長



PROFILE

1974年、シテ喜多流職分である大島政允の長女として広島県福山市に誕生。2歳で「鞍馬天狗」の子方(子役)として初舞台を踏む。東京藝術大学音楽学部邦楽科を卒業した翌年の98年、公益社団法人 能楽協会に登録。喜多流で初の女性能楽師として活動を開始する。以来、福山市の大島能楽堂を拠点に能公演に出演する傍ら、小中学生などに能の指導を行う。2009年、11年に行われた新作の英語能「PAGODA」の海外公演ではシテを務めた。

とても楽しかった
子方(子役)時代

佐々木 先ほど能舞台を拝見いたしましたでしたが、創建から百年ですか。大変立派ですね。大島家が本拠としておられる広島県福山市はいわゆる地方都市ですが、地方でこれだけ本格的な能を楽しめる環境があるんですね。

大島 能にはいくつかの流派がありますが、大島家は、江戸時代を起源とする喜多流に属します。喜多流の力強く、質実剛健という芸



1986年には能「唐船」に、四兄弟揃って子方として出演。衣恵さん(一番左)は当時12歳(小学6年生)。シテを演じるのは祖父の三代目久見氏。



1978年、3歳のころ。仕舞「葛城」の舞台。

風は武家社会に受け入れられ、福山でも初代藩主の水野勝成が城内に能舞台をしつらえたほどです。やがて明治時代を迎え、福山藩士だった大島七太郎が能楽師となり、広島県東部の備後地域で能の普及に努めたのです。その後、二代目が最初の能舞台を創建。戦災で消失した後、三代目が建設し、そして一九七一年に建て替えられて現在の能舞台となりました。

私たちが兄弟も一生懸命になっていたのだと思います。二歳の時に子方(子役)として初舞台を踏みましたが、舞台後はいつも褒めてもらっていました。終わったことは責めても仕方がない、という考えなのです。だから私にとって、稽古や舞台は楽しいものでした。

喜多流で初めての
「女性のシテ」に

佐々木 そのまま順調に、子方から次の段階へと進まれたのですか？

大島 いえ、そうではありませんでした。能楽師の家では一般に中学生になると、本格的な修業への第一歩を踏み出します。「シテ方喜多流職分」の大島家の者が目指す道は、舞や謡を担当する「シテ」です。シテとは「主役」であり、舞台のプロデューサー的な役割も担います。ところが喜多流は、女性のシテを認めていなかったんです。他流派では女性のシテが既に登場していたのですが、男性的な芸風の喜多流には馴染まない、と思われていたのでしょう。能とはずっと関わりたいが、道は閉ざされている。どうしよう、と思案にくれていた時、母が「東京藝術大学で能の勉強ができる」と教えてくれました。

佐々木 大学ではどんな出会いがありましたか？

大島 入学した邦楽科の学生のうち、半数は能楽師の家ではない、一般家庭の出身者でした。別の大学から、能が好きで改めて藝大に入り直した人もいます。もちろん、女性もいました。刺激を受けましたね。バックボーンもないのに能のプロを目指す人々がいる一方、能楽師の家に生まれた私がたった一つの壁も乗り越えられないのは、情けない気がして。そして、喜多流だけ女性を認めないという状況はいずれ変わるのではないかと、とも思えてきたのです。

佐々木 どうしてそのように思われたのでしょうか？

大島 そもそも、他流派に女性のシテが登場したのは戦後のことです。室町時代に観阿弥・世阿弥が登場し、現在につながる能の形を完成させてからおよそ六百年になりますが、そうした能の歴史の中で、女性の活躍は六十年ほど。変革は起ころはじめたばかりなのです。喜多流も、これから変わるのではないかと。声をあげれば、動き出すのでは？ そう考えて、「やりたい」と思いを真摯に伝えたのです。そのかいあってか、「父の下でなら」という条件付きではありますが、喜多流で初の女性能楽師として認められました。

佐々木 大島さんの思いのこもったアピールが、喜多流の人々の心を動かしたのでしょうか。

大島 もちろん私一人の力ではありません。父母、後援者など、周囲の支援をいただけたのが大きかったと思います。

演じ手と観客が 共につくる 感動の舞台

佐々木 能は「面を用いて演じる」という点が、たいへん特徴的でもあり、興味をひかれる気がします。

大島 おっしゃられるように、能の大半の演目で、シテは面をつけます。女面、男面、鬼神など面にはさまざまな種類があり、演目によって使い分けます。この面には小さな穴が空いているだけなので、舞台の全部は見

えません。周囲の風景が制限されるおかげで、雑念を排除できるのです。つまり演じ手は面をつけることによって、閉ざされた空間の中で己と向き合い、集中力を極限まで高めるわけです。その集中力が、凛とした雰囲気を生み出します。

佐々木 面をつけることで、集中力が高まるわけですか。能における面は、演目の登場人物に扮するという以上の価値を持つ存在ですね。

大島 演じ手の集中力を感じてくださったお客さまは、その思いにもっと触れるため、自分の集中

「ものだったのです。だから公演を行う前、お客さまに演目の解説を行うのですが、そこで「観客のみなさまは、波になったつもりで見てください」とか、「桜の花びら」になったつもりで見てください」とお願いすることがあります。つまり、みなさまも能をつくり上げる、大事な風景の一部なのですよ、と。

佐々木 なるほど。私も何度か能を鑑賞したこ



今年四月に行われた第百三十二回の定期公演で能「花月」を舞う大島さん。

力を高め、感性を研ぎ澄まそうとされます。お客さまのそういった集中力の高まりが、演じ手自身の集中力をさらに高めるのです。このように、演じ手とお客さまが互いに集中力を高め合い、作用し合った舞台には、心が震えるほどの感動があります。ここに私は醍醐味を感じるので。

佐々木 観客も単なる鑑賞者ではなく、共に能をつくる参加者なのかもしれませんね。

大島 もともと能も、形式が定まる前は「お祭り」に近い面があり、観客と演者が明確に分かれていませんでした。「共に参加し、つくり上げ

とがありますが、集中して見ていると、引き込まれていく面白さを味わいました。いつの間にか、他の観客の存在を忘れ、まるで自分一人で能を見ているような、不思議な感覚を味わったことがあります。そういった、お客さまと共に集中力を高め合えるほどの舞台を生み出すには、やはり長い修業が必要なのでしょう？

大島 どうすればそのような舞台を生み出せるかなど、私もまだ口にする立場ではありません。一つ言えるのは、「真の花」にならねばならない、ということ。これはもともと、能の大成者として知られる世阿弥が、その著『風姿花伝』の中に残した言葉です。若年のころは、周囲がもてはやしてくれます。しかしそれは芸が優れているからではなく、若々しさや活気があるからです。歳を経て、若々しさや活気が衰えてもお輝き続ける価値こそ、「真の花」なのです。そうなるために、周囲がもてはやしてくれる時こそ初心を忘れず、稽古に励まなければなりませんし、この言葉を自身にとっての大目標としていつも心に留めています。

能と人々をつなぎ 可能性の扉を開きたい

佐々木 ところで、お好み焼について何か思い出がありますか。

シテとして、この大島能楽堂の舞台でさまざまな曲を演じてきた大島さん。今年11月の定期公演では、能「葛城」を舞う。



大島 小さいころに、広島お好み焼をよく食べていましたね。土曜日のお昼は、兄弟揃ってホットプレートで囲みました。そしてキヤベツを刻んでお好み焼を焼き、顔を粉だらけにしながら、みんなで食べるのが、大島家の土曜日の定番でした。定番は豚肉で、揚げ玉が入るとちよつと贅沢な気分になっていました。

佐々木 家族みんなでわいわい言いながら楽しめるのが、お好み焼の良さの一つですからね。

大島 私たち兄弟が仲が良いのも、子どものころのそういった記憶があるからかもしれません。今でも、県外から友人やお客さまをお迎えした時は、広島市まで足を運んでお好み焼のお店にお連れします。

佐々木 舞台の体力づくりのため、食生活などで気をつけていることはありますか。

大島 公演が続くと外食が多くなるので、野菜ジュースでビタミンを補うようにしています。それと、水をよく飲みます。舞台は乾燥しているので、喉を傷めますから。もともと喉がそれほど強い方ではないので、水分でケアしています。

佐々木 面の奥から声を出し、客席まで届かせるのですから、すごい声量ですよ。

大島 ただ声量の大きさで言えば、体格のある男性にはかありません。その代わり、私はで

きる限り、観客が聞き取れる声にすることを心がけています。しつかりと届かせる技術があれば、声量がなくても謡は伝わります。

佐々木 今後はどういったことにチャレンジしたいですか？

大島 舞台をどこまで突き詰められるか、ですね。まだまだ修業中の身ですから。加えて、どれだけ多くの人に能に触れてもらえるか、を考えています。二〇〇九年にヨーロッパ、二〇一一年には中国で、新作英語能「PAGODA（パゴダ）」の公演を行ない、好評を得ました。英語での謡には苦労しましたが、それでも日本語以外でも能を演じることができ、外国の人々にも能を伝えることができるのだという手応えをつかんだことで、可能性の扉がさらに開きました。また、小中学生、高校生などに向けた能の体験講座や出張授業も行なっていますが、これも理由は同じ。専門家だけが理解できる世界ではなく、能の魅力をもっと広く伝えたいんです。

佐々木 一般の我々には「能の世界は敷居が高い」ととらえてしまいがちです。しかし大島さんのような方がいると、能を身近に感じ、「行ってみようか」という人も増えると思います。大島さんは、能と幅広い人々との架け橋になれる、貴重な存在です。日本の大切な伝統芸能のため、がんばってください。

◎対談を終えて

柔らかな眼差しの奥に秘めた情熱



語り口調も表情も柔らかな大島さん。しかしそれだけではありません。女性のシテ方は認めないという喜多流の壁を突破したことからわかるように、ほとぼしる情熱を内に秘めた人だとも感じました。外は穏やかだが、内は熱い。大島さんのそうした生き様は、まさに能の世界を体現しているのかもしれない。

撮影場所／喜多流大島能楽堂
広島県福山市光南町2-2-2

能舞台とほぼ同じ広さの稽古場。ここで日々、稽古を重ねる。

